

氏名（本籍）	フベルトス・ドライヤー（ドイツ連邦共和国）		
学位の種類	博士（音楽学）		
学位記番号	博音第74号		
学位授与年月日	平成17年3月25日		
学位論文等題目	論文『地歌における三味線と歌の関係』		
論文等審査委員			
（論文審査主査）	東京芸術大学	教授（音楽学部）	柘植元一
（論文副査）	”	”（”）	山本泰正
（”）	”	”（”）	片山千佳子
（”）	”	助教授（”）	安藤政輝
（”）	”	”（”）	塚原康子

（論文内容の要旨）

日本音楽、特に地歌の分析は、多くの先行研究を経てなお有効な分析方法が確立されているとは言いがたい。筆者は修士論文で三曲合奏の分析を行った際に、三味線と歌の関係が、他の楽器間において認められる諸関係よりもはるかに複雑であることを確認した。以上2点に鑑み、本論文は次の3点を目的とする。1) 地歌における三味線と歌の関係について、新たな分析方法について検討・提示する。2) 提示した方法に基づいて入門的な地歌を中心に具体的な分析を行い、その成果を他の端歌・手事物に適用する。3) 分析結果と分析方法の妥当性について考察する。論文は序論（第0章）と5つの章からなる。序論では本論文のテーマとそれに伴う4つの基本条件を提示した。本論文は分析を主眼に置くため、歴史上・文献学上の問題、歌詞の与える影響、異流派間の比較検討は捨象される。また、分析には採譜に基づいたものとされる楽譜を使用した。第1章では地歌における三味線と歌の関係について、過去の諸文献に基づいて予備的な考察を行った。思考実験としてそれらの関係について3つのモデルを措定し、次の結論を得た。地歌における歌と三味線の旋律の間には、明らかに構造的な従属関係が認められるが、その構造は極めて柔軟であり、流派や演奏家の違いによってその構造の「解釈（構造要素の組み合わせ）」にも差異が生じ得る。このことは、いかに厳密で精緻な分析を行ったとしても、地歌の三味線と歌の関係には「分析しきれない」部分が残されることを示唆するものでもある。第2章では具体的な分析方法に関する検討と考察を行った。本論文における分析の理論的背景は、認知心理学における「事例モデル」と音楽情報の処理モデルを組み合わせたものである。前者からは地歌の学習過程を考慮して曲の分析を行うことで、三味線と歌の関係における「見えない理論」によって構成されるコードが析出できる。また、音楽情報の処理を宣言的知識（パターンの認識）と手続き的知識（パターンの使用・変形のルール）に区別して考察した。さらに分析のツールは、演奏者の生理的属性（生理的に与えられた音楽の次元）に近くなることを目指した。

以上の考察を経て、次のように具体的な分析の手順を定めた。ある曲の分析からルールとパタ

ーンを導き出し、次の曲の分析結果と比較する。それが既存のルールやパターンで説明できない場合、既出のルールやパターンとの関係を調べるためにパラダイム・テーブルを作成し、さまざまな属性の影響関係を計測して新たなルールを見いだすようにする。分析対象曲として、宮城会から楽譜が出版されている端歌8曲、長歌手事物1曲、手事物1曲を選んで詳細に分析し（予備的な分析を行った曲を除く）、これらを別冊冊子にまとめた。また、地歌の学習過程について主要な地歌演奏家から聞き取り調査を行い、その内容を分析の考察や議論に反映させた。第3章では、地歌初心者の学習過程に不可欠な認知行動のシミュレーションとして、手ほどき曲や初心者向けの曲として頻繁に用いられている3曲の端歌《門松》《鶴の声》《黒髪》を前述の方法によって分析した。これら3曲の分析を経て、三味線と歌の関係に関するルールとパターンが、以下の7点について確認できた。1) 開始音、2) ズレ1/2またはズレ0、3) オルナメント、4) 歌に存在しない音、5) ズレの変化、6) フレーズの終止、7) 特殊なパターンの存在。これらのルールとパターンのセットを「基礎セット」と名付けた。第4章では、他の端歌として《菜の葉》《芦刈》《すり鉢》《柚香炉》《雪》を、長唄手事物として《難波獅子》を、手事物として《夕顔》を第3章で得た「基礎セット」に基づいて分析した。この作業によって、「基礎セット」のさらなる妥当性が検証され、同時に三味線と歌の関係から見た端歌、獅子物、手事物の偏差が抽出された。端歌には「端歌セット」と呼ぶことのできるような数多くのパターンの存在が見られ、獅子物ではその他の曲に現れない「拡大擦れ」が発見されたが、それを除けば「基礎セット」との差異は程度の問題に還元される。《夕顔》においても、歌と三味線の関係は端歌とほぼ同様の結果が得られた。ところが二者の関係がはるかに複雑となる例外的な端歌の存在が確認され、特に《雪》においては諸ルールの存在を演奏家が認めたとうえで、原型からの逸脱を曲に特有のニュアンスとして意識的に享受しているかのように見受けられた。第5章では結論として、分析方法の有効性と今後の展望を議論した。本論文で定めた「基礎セット」を介して地歌における三味線と歌の関係の、おおむね6割から8割が解明された。さらに本論文における分析方法は形式的に厳密であるため、分析のコンピュータ・モデル化に資するものと評価できる。